

自生種の種子を供給する原野がほとんど失なわれている。このような立地では、裸地の再生群落は、人里植物同志の交代の形で久しく持続するであろう。

帰化植物と在来の人里植物とは、渡来の時代が違っただけで結局ほとんどが外来種であるとする見方に疑いがかけにくいまでに似ている。しかし、幕末頃と以後のものと以前のものとでは原産地が違う（以後のもの欧米原産80%，以前のもの東アジア83%，筆者試算）のみならず、性格そのものの違いが伺われる。そこで、この両群を対照しつつ考察することによって、人里植物の生態の解明がはっきりされるものと考えている。

終りに当り、この研究に、陰に陽に協力して下さった多くの方々に対し感謝の意を表します。直接には、標本同定を通して種々のご指導をいただいた長田武正教授、また、研究の便宜とよき示唆を常に与えて下さった清水建美教授に厚く御礼申し上げます。

（追加）「中部信州帰化植物 目録」（本誌第6号）に次の一種を加える。

セイヨウノコギリソウ *Achillea millefolium* 欧、多年生、S. 47 霧が峰

〔植物ニュース〕 8. ハルザキヤマガラシ *Barbarea vulgaris* R. Br. 霧が峰でこの植物に気付いたのは昭和46年であったが、年々増加し、3～4年で霧が峰インタから池のくるみにつけほど1kmの範囲に広がった。菜の花畑を思わせる黄色の花は、5月の霧が峰高原のイメージを変えてしまった。（浅川富雄）

9. セイヨウノコギリソウ *Achillea millefolium* L. 霧が峰の車山山荘から車山リフト乗場まで約6kmのビーナスライン沿いの切土面は、セイヨウノコギリソウの優占群落に変わった。昭和47年初見であったが以後3年間にヒメジョオンやアレチマツヨイグサも遠慮する切土面全面に進出した。亜高山帯の植生回復の困難性と関連してその繁殖力に注目したい。（浅川富雄）

〔新刊紹介〕 浜 栄助「原色日本のスミレ」 誠文堂新光社、昭和50年5月20日発行、A4判、図版120、全280頁、15,000円。

会員の中からまた一つ傑作が生まれた。発行はほとんど1年前であり、すでに多方面において紹介されて来たが、会の誇りとしてここに取り上げないわけにはいかない。浜さんといえばスミレというほどに、著者の名は全国的であるが、その浜さんが20年間の研究の成果を結集したのがこの本である。スミレの分類体系と学名索引をかねた目次、形態・生理・検索・分布論などを扱った総説に続き、120枚の自作の原色図版とその解説が圧巻である。これらは地下部をも含めた全形図、変異を網羅した部分図、精密な柱頭の拡大図等著者以外には決してかけない図ばかりである。図版に伴う解説は、形態、生態、分布にわたって詳細そのもの、扱ったスミレは雑種75品を含めて232と日本産のすべてである。まさにスミレ属のバイブルというべき大著である。（T. S. 生）